

講座1 「心に響く演奏表現をめざして～不協和音の魅力・威力～」

講師：大場 文恵（本学教授 ピアノ専攻主任）

ピアノ演奏に関する多くの文献の中で、技術面や練習方法について解説・記述しているものに比べ、演奏表現について書かれているものは少ない。しかしながら、技術だけでなく、聴く者を魅了する「説得力のある表現」を伴うことは、より良い演奏をめざす上で不可欠である。そこで演奏表現に関して明確に述べられている「18世紀の三大名著」と言われている音楽書に触れながら、演奏表現や表現するための手法について探っていこうとするのが、大場教授による本講座のテーマであった。



大場教授による講座1。一つのフレーズを異なるように弾き、表現にどのような差がでるのか、受講者の皆さんとともに確認しながら解説しました。

18世紀の三大名著とは、J. J. クヴァンツ著『フルート奏法』、C. P. E. バッハ著『正しいピアノ奏法』、L. モーツァルト著『基本的ヴァイオリン奏法』の3冊である。これらは、ピアノに限った内容のものだけではないが、「各音にどのような強弱変化がつけられるべきかは、とても大切なこと」「情緒の変化は音楽にとって非常に大切」(J. J. クヴァンツ)、「良い演奏とは(中略)情緒に即して演奏すること」「音楽家は自分自身が感動に浸ることができなければ、聴衆を感動させることはできない」(C. P. E. バッハ)、「優れた演奏家とは作曲者自身も気づかなかったような《情緒》を醸し出し、作曲者の《独自性》を識別し表現できる」「作曲者の指示どおりに歌うように演奏してほしい」(L. モーツァルト)などと、いずれもピアノを演奏する者も参考にすべき考察が記されている。

大場教授は、演奏者が表現するためには「情緒」を重視すべきことを述べながらも、「それでは個人の感覚・感性に任せる演奏でよいのか」という疑問も投げかけ、R. シューマンやH. P. ロジェなど、近代の音楽家による考察も参照し、「作曲者が記した指示どおりに正確に楽譜を読み取ることは重要だが、それだけに注意し演奏するのはリスクがある。楽譜にすべての指示が記載されているとは言い切れないからだ。そのため、演奏者自身が楽譜を分析し、考え、推量することも適切な表現をするためには必要なのではないか」と、教授の見解を示した。

また、豊かな表現をめざす上でポイントとなる「不協和音と協和音」「倚音」「減七の和音」を取り上げ解説した。不安・緊張感をもたらす響きを持つ不協和音と、安心・弛緩をもたらす響きを持つ協和音。倚音(非和声音)から和声音への移行は、解決に向かう働きがあること。減七の和音から協和音への移行は、「高まった緊張感」を「解放し、安堵をもたらす」ような働きがあり、減七の和音には音楽の流れを変える威力さえあるということ——それぞれの機能的な特徴を意識し、テヌートをすることによって彩のある表現が実現されることを、大場教授が実際にピアノを弾いて音を出し、あるいは一つのフレーズを意図的に異なるように弾いて、音を聴いた印象を確認していった。

「演奏表現は沢山の要素によって成り立つので、これがすべてではないが、不協和音と協和音が表現の大きな鍵を握っていることはご理解いただけたと思う。その中でも特に倚音と減七の和音を意識することによって陰影のある明確な表現が生まれ、心に響く演奏表現に近づけるのではないかと大場教授は受講者に語った。

「和声の分析や、楽譜記号の読み取りなどはいわゆる音楽規則に沿うものだが、規則というのは決して縛られるものではなく、より深く理解することによって、自身の演奏表現や解釈の幅が広がっていくものである、と捉えてほしい」との言葉で、講座は締めくくられた。

講座2「J. S. バッハ：二声インヴェンションと、そこに至る指導法 ～バロック音楽とポリフォニーに親しむために～」

講師：國谷 尊之（本学教授）

J. S. バッハのインヴェンションは偉大な芸術作品であると同時に、ピアノを学ぶ者にとって特別な価値を持つ教本でもある。インヴェンションの基礎知識、またインヴェンション第1番～第5番の各曲の特徴を理解し、さらにその指導法について指導教材も含め考察を深めるものとして、國谷教授が本講座を開講した。

インヴェンションの各曲には異なる主題があり、それぞれの楽譜を読み込むことで曲全体のキャラクターが見えてくることを解説し、「そのため、まずは曲全体の構成、流れを把握する。そのうえで、演奏をどう組み立てていくかを考察することが、インヴェンションの演奏において、また指導において非常に重要である」と、國谷教授は説明した。

曲ごとの解説では、「インヴェンション第1番」に関しては、「ハ長調の単純明快さのある曲、澄んだ、明るい響きのある曲」「転調に伴う鮮やかなキャラクターの変化があること」などを特徴として示し、実際に演奏をしながら、曲の構成について、またより適した演奏方法について解説した。インヴェンション第1番の構成は3区分に分けられるものとし(4つに分ける考え方もあるが、本講座では3つに分け考察)、最初の区分に適した演奏方法を説明するにあたり、「初対面の人同士が互いに自己紹介し合うようなイメージ。自己紹介する時は、強調し過ぎた振る舞いをする、相手は戸惑ってしまう。この曲の最初の区分も同じで、強調し過ぎないよう、素直に弾く表現が適している」「2つ目の区分では、短調への転調を経て響きに変化が現われてくることで、新たな場面が展開されていく。ひと通りの自己紹介の後、相手に質問を投げかけ、その回答を受け、次に相手からの質問を受けて、それに回答し……と、会話が次々に展開されていくかのようなイメージで演奏すると良い」など、曲の響きや流れの変化を、視覚的なイメージも含めてより理解しやすくなるようなユニークな解説が繰り返された。

「インヴェンション第2番」の解説を続けた後に、バロック音楽やポリフォニーを題材にした児童向け教材をいくつか紹介した。「民謡素材など、うたいやすい曲で学ばせるのが良い。うたいやすい曲を教材にすると、音符を追って弾くことだけに集中するような学び方ではなく、『心の中で音楽を創る・創造する』といったことも経験しながら学べるのが期待できるからだ。それぞれの曲の持つ響きの美しさや、それを奏でる喜びを体感しながら学べる指導書が、児童期の良書と言えるのではないだろうか」と、國谷教授の見解を述べた。

インヴェンション第3番～第5番についても、実際に演奏しながら、それぞれの構成やキャラクターの解説に加え、指導の現場に活かせる実践的な解説も行われた。

「インヴェンションを学ぶことで、バッハの作品を理解するというのは到底難しいことであるが、インヴェンションは、『心の中で音を聴くこと』『カンタービレ奏法』『楽譜の塊り読み』といった力をつけさせる指導において、非常に有効な教材ではないだろうか」「バッハの作品への理解を深めることは容易ではない。しかしながら、バッハの作品に対し、理解できる部分が増えてくることで、後世の多くの作曲家による作品がより一層理解しやすくなるはずである。そのためにも、ピアノの生徒が、このインヴェンションに親しみを感じてもらえるよう、指導を行っていききたいものだ」と國谷教授は提案し、講座は終了した。

國谷教授による講座2。指導現場で活かせる実践的な内容に、熱心にメモをとる受講者の姿が多く見られました。一方で、教授ならではのユニークな説明が聴かれる場面では、会場に笑い声が響くことも。



講座3 「知っておきたいリズムの基本とリトミック～レッスンを始める前に～」

講師：藤原 優里、福原 亜希（東邦音楽短期大学 講師）



輪の中で指導する藤原講師と、ピアノ伴奏を務める福原講師による講座3。

音楽による総合教育、リトミック。本講座は、リトミックをピアノ指導の現場でも活用できる教育手法であるとし、受講者に実際にリトミックを体験してもらうことで、ピアノ指導に活かせるリトミックを考えてもらおうという主旨のもと、ワークショップ形式で行われた。

「ピアノやヴァイオリンなどの楽器のレッスン講師によると、リトミックを受講しながら、もしくはリトミックのレッスンを受けた後に楽器のレッスンを受けている生徒と、楽器のレッスンだけを受けている生徒には違いが見られる、とのこと。

リトミックを受講している生徒は、『音楽が好き』『音をよく聴く』『自分で考え、表現する』『社会性が高くレッスンに集中できる』との評価がよく聞かれる。」

福原講師のピアノ伴奏とともに、ワークが始まった。ピアノのリズミカルな伴奏と藤原講師の指示に合わせて、受講者全員が手をつなぎ、輪をつくった。講師が伴奏に合わせたい始め、受講者も一緒に歌うよう促す。その後、講師の指示・ピアノの合図に従い、受講者は以下のようなワークを行った。

①輪になった状態で隣り合わせた二人でペアをつくる。

【ピアノ伴奏】4分音符を刻むリズムの演奏。

【講師】「ペアごとに、リズムに合わせて、二人の手を合わせて手拍子」と指示。

②ペアごとに、4分音符の長さで手拍子を続ける。

【講師】「お互い、自己紹介を」と指示。

③ペアごとに、互いに自己紹介。

【講師】「ペアになった相手は、『4分音符のお友達』」と説明。

【講師】「バイバイとお別れして、スキップ」と指示。

【ピアノ伴奏】スキップのリズムの演奏。

④受講者はスキップをしながら好きな方向に動く。

【ピアノ伴奏】2分音符を刻むリズムの演奏。

【講師】「さっきとは違う相手とペアを作って、手をつないで」と指示。

⑤受講者はそれぞれに、新たな相手を見つけ、手をつなぐ。

【講師】「ピアノに合わせて、スウィング！」と指示。

⑥新たなペアで手をつなぎ、2分音符に合わせて体を左右に揺らす。

【講師】「お互い、自己紹介を」と指示。

⑦ペアごとに、互いに自己紹介。

【講師】「今回ペアになった相手は、『2分音符のお友達』」と説明。

【講師】「皆さん、バラバラに。スキップ」と指示。

【ピアノ伴奏】スキップのリズムの演奏。



体、耳を使い、音符の長さの理解を深めるためのワーク。藤原講師の指示に合わせて、ワーク開始。子どもに限らず、大人も笑顔になる楽しいワークでした。

⑧受講者はスキップをしながら好きな方向に動く。

【ピアノ伴奏】4分音符を刻むリズムの演奏。

【講師】「このリズムは？どのお友達か覚えていますか」

【講師】「そう、『4分音符のお友達』でしたね、手拍子ですね」と指示。

⑨受講者はそれぞれ、最初にペアとなった相手を探し、手拍子をする。

【ピアノ伴奏】2分音符を刻むリズムの演奏に変わる。

【講師】「今度はどのお友達ですか」と指示。

⑩受講者はそれぞれ、2番目にペアとなった相手を探し、スウィングの動きをする。



同様のパターンで『8分音符のお友達』とのペアもつくり、8分音符のリズムが聴こえれば、『8分音符のお友達』を探し8分音符の動き、2分音符のリズムが聴こえれば、『2分音符のお友達』を探して2分音符の動き……というように繰り返した。このワークの目的は、①それぞれの音符が持つ音の長さの違いを、耳、体を使い理解する、②音をよく聞いて判断する力を育てる、③自己紹介をし、緊張をほぐす、である。

「記号(音符)」を覚え、長さや違いを教える方法と異なり、まず音符の長さを体で表現し理解できるようになることを目的としている。音符の読み方はわからなくても、体を使って違いを表現できるようになる。「4分音符」という名前を覚えるのは後からでもいいという考えだ。

ペアになり、ボールを受け渡すワークも行った。3拍子に合わせてボールを受けたり、渡したりできるよう、二人の間の距離を適切にとる。拍子が変わり、2拍子になると、その拍子に合わせたボールの受け渡しができるよう、ペア間の距離を縮める。こういった動きを繰り返す中で、受講者(リミックを受ける生徒)は、リズムを聴き、考え、ペア間の距離を主体的に測るようになる。そうして、音楽と空間への理解を深めていくことが狙いである。

音階を表すカタカナを記入した7色の色紙(折り紙)を用い、音階を視覚的に表す方法も紹介された。上行の音階は得意だが下行は苦手な子供たちが多いことを踏まえ、色によって音の並びを視覚的に捉えながら、聴こえた音の1つ下の音を歌うなどのワークも行った。これは、まだ楽譜を読めない幼児の指導において、ソルフェージュにも通ずる学びが実践できるワークである。ほかにも数種のリミックワークを実践した。リミックを初めて体験した受講者も多い中、ワークの楽しさに声を上げて盛り上がったり、受講者同士、ワークを通じ



音階のカタカナを示した折り紙を用いたワーク。子どもがより楽しめるよう創意工夫に満ちたワークに、受講者の皆さんは感心しながら参加されていました。

た交流で親しくなれたりしたことで、終始、活気に満ちた講座となった。

「頭だけで覚えるのではなく、体を使って音楽を『体験する』のがリミック。本日紹介したワークはリミックのほんの一部。ピアノの生徒が練習中に上手く弾けない時、生徒がなかなか思ったように表現できない時などに、一度ピアノから離れてみて、先生方オリジナルのアイデアで、体を使って表現してみることを、ぜひ試していただきたい。」(藤原講師)